

シンガポールの

「音楽文化」について

シンガポールは、東南アジアの島国で、多文化の国として知られています。音楽文化も、多様な背景を持つ人々によって豊かになっています。伝統的な音楽から、最新のポップスまで、様々な音楽が聴かれます。また、音楽フェスティバルやコンサートも、多く開催されています。シンガポールの音楽文化は、多様性と創造性の宝庫です。



2025年 8月22日
高井 莉央

はじめに

私は音楽系のアプリやサーバーを作るフロントエンドエンジニアになるために、シンガポールで日本と海外の音楽の違いを知りたいと思った。

なぜなら、音楽の感じ方や楽しみ方は文化や国によって大きく異なり、それを理解することが、より多くの人に使いやすく、魅力的なサービスを作る手助けになると考えたからだ。

シンガポールは多民族国家であり、アジアと西洋の文化が入り混じった独自の音楽文化を持っている。そのような場所で実際に音楽に触れたり、現地の人と交流したりすることで、日本とは異なる視点を得ることができると期待した。

このレポートでは、私がシンガポールで体験した音楽文化や、日本と海外の音楽に対する考え方の違い、そしてそれがアプリ開発にどう生かせるかについて考察する。



日本とシンガポール のカラオケの違い

シンガポールに滞在中、私はバディと一緒にカラオケに行く機会があった。日本ではよく行っていたカラオケだが、シンガポールのカラオケにはいくつか意外な違いがあり、文化の違いを感じた。カラオケは日本発祥の娯楽として知られているが、現在では多くの国で楽しまれている。シンガポールでもカラオケは人気があるが、その楽しみ方や設備には日本と異なる点もいくつか見られた。「カラオケ」と聞いて思い浮かべる光景は、日本とシンガポールでどれほど違うのだろうか。実際に現地で体験してみると、カラオケという同じ名前の娯楽にも、文化の違いが色濃く現れていることがわかった。



- ・個室で歌う
- ・時間制+飲食代。フリータイムや学割など割引制度も充実している。
- ・歌うこと自体を楽しむ。娯楽としてだけでなく、飲み会の延長やストレス発散の場でもある。



- ・個室もあるが「パブリック（オープンスペース）」や「KTV (Karaoke Television)」も人気である。
- ・時間制だが、最低注文金額 (Minimum spend) が設定されていることが多く、飲食の注文が前提になることもある。週末や夜などは料金が高め
- ・歌だけでなく、社交の場としての意味合いが強い。特にKTVでは食事や飲み物を楽しみながら長時間過ごす感じが一般的。

まとめ

日本ではカラオケは「一人でも気軽に楽しめる娯楽」であるのに対し、シンガポールでは「人と交流するための社交的な場」としての側面が強いです。こうした違いを理解することで、音楽系アプリやサービスを開発する際にも、その国の文化やニーズに合った設計ができるようになると感じました

国民的ソング「HOME」

タイトル	home
作詞・作曲	Dick lee
初公開年	1998年

「Home」は、シンガポール建国記念日（ナショナルデー）のために作られた曲です。1998年のナショナル・デー・パレード（NDP）で初めて披露されて以来、多くのシンガポール人に親しまれてきました。この曲はシンガポールに対する愛や帰属意識、団結を表現した内容で、移民国家としてのシンガポールの「多様性の中の一体感」を象徴しています。

— COVID（コロナ期間中） —

2020年には、コロナ禍の中、希望と連帯を象徴する曲としてテレビやSNSで再放送・シェアされました。

？.なぜhomeは国民的ソングになったのだろうか？

シンガポールには移民一世や外国ルーツの人々が多くいます。そうした中、「Home」は民族や言語を越えて、共通の“故郷＝シンガポール”という感覚を育むための象徴的な曲として機能しています。

つまり、多様性の中の一体感（Unity in Diversity）を音楽で感じさせてくれる曲なのです。

音楽アプリ開発への ヒントとしての気づき

1. 文化の違いがUXに与える影響

日本ではカラオケや音楽アプリにおいて、使いやすさや個人の好みに応じた機能（例：採点機能やマイリスト）が重視される。一方、シンガポールではカラオケが「社交の場」として使われることが多く、グループでの利用を意識したデザインや機能が求められると感じた。これにより、アプリ開発でも、複数人での共有・参加機能（例：同時再生・プレイリスト共有・デュエット機能）などが重視される可能性があると感じた。

2. 言語・文化への多様性への配慮

シンガポールでは、多民族・多言語社会であるため、音楽のジャンルや使用言語も非常に多様だった。例えばカラオケでも英語、中国語、マレー語、タミル語の曲が揃っていた。この経験から、音楽アプリを開発する際には、言語切り替え機能や、多言語対応や検索・歌詞表示機能が不可欠だと実感した。

まとめ

シンガポールでの滞在を通じて、私は「音楽の楽しみ方」が国や文化によって大きく異なることを実感した。日本ではカラオケが比較的プライベートな空間で、採点機能や一人カラオケなどが発展しているのに対し、シンガポールではカラオケが友人や家族との社交の場であり、交流の手段として使われていることに驚いた。また、国民的ソング「Home」のように、多くの人が共通して愛する曲が存在し、それが国家的なアイデンティティや一体感を支えていることにも深い感銘を受けた。

このような経験を通して、私は将来、国や地域の文化や価値観に合わせて最適な音楽体験を提供できるフロントエンドエンジニアになりたいと思うようになった。たとえば、ユーザーの地域情報と言語設定に応じて、自動的に人気ジャンルやレコメンドのロジック、UIデザインの配色やレイアウトを調整するなど、柔軟性のあるフロントエンド設計を実現したい。また、シンガポールのような多民族国家では、英語だけでなく中国語・マレー語・タミル語などへの多言語対応が必須であり、将来的にはそのような国際化対応（i18n）に強いアプリケーションを開発できるよう、今からスキルを磨いていきたいと考えている。

単に音楽を再生できるアプリではなく、「その国の文化に合った聴かれ方や共有のされ方」にまで踏み込んだ設計こそが、ユーザーにとって本当に価値のある体験になる。今後も、さまざまな国の音楽文化を学びながら、技術と文化理解を融合させた音楽アプリ開発を目指していきたい。